

ドラム・タオ

ドラム・タオ 1993年結成した和太鼓パフォーマンス集団。大分県を拠点に、国内だけでなく世界28の国と地域で公演を繰り広げ、世界観客動員数900万人を誇る。2020年9月には、大分県に野外劇場「天空の舞台」を備える芸術村「TAOの丘をオープンし、地元観光・文化振興に貢献している。

迫力満点の和太鼓の音色と力強い舞のコラボレーションが、観客を熱狂の渦に巻き込んだ。4日、和太鼓パフォーマンス集団「DRUM TAO(ドラム・タオ)」の30周年記念ライブ(北國新聞社など共催)が金沢市の北國新聞赤羽ホールで開かれ、精鋭たちが渾身のステージを繰り広げた。出演したメンバーは北國新聞社の取材に「エッジの効いた音が気に入った」と絶賛。今年開館15周年を迎えた同ホールの魅力を語った。

DRUM TAOは、今回のライブを含めて3度、赤羽ホールを訪れている。世界を股にかけて活躍しているメンバーにとって、赤羽ホールは和太鼓との相性が抜群なのだという。

「和太鼓の響きが残ります。音がまろやかすぎて輪郭がぼやけてしまふ。赤羽ホールは音がクリアに響きますね」とメンバーの岸野央明さん(39)は語る。

同じメンバーの江良拓哉さん(38)は「お客さんと距離が近く、表情がよく見えて一体感が生まれた」と振り返る。ライブでは出演者が客席まで行き、観客とハイタッチで交流する一幕も。「コロナ禍もあって、客席に行くなんて3年ぶり。久々にあれだけ盛り上がり、お客さんもすすきりしたと思う」と江良さんは充実感をにじませた。なくてはならない地

「エッジ効いた和太鼓に」



迫力のパフォーマンスを披露したDRUM TAOのメンバー
—北國新聞赤羽ホール

相性抜群の音響絶賛

「うちの太鼓は100%、浅野太鼓楽器店(白山市)の和太鼓を使っています」。DRUM TAOの仕掛け人であるタオ・エンターテイメント(福岡市)の藤高郁夫社長はこう説明する。一度、安価な韓国製の和太鼓を注文したことがあるが、「全くダメ。練習用にもならなかった」と藤高さん。「太鼓をどこん科学してきた浅野太鼓さんは、まさにオンリーワンの技術

観客と距離近く一体感

力がある」とたたえる。すしナンバールワン 金沢の印象について岸野さんは「全体的に上品できれいな街」と話す。味覚にもほれ込んだようで、特に有名すし店「小松弥助」は「びっくりするぐらいおいしい。あれはナンバールワンだ」と、江良さんは笑みを浮かべた。地元の支えを受けながら、30年間実直に公演を続けてきた。地元・大分県に野外常設劇場「TAOの丘」を開設、周辺の旅館やペンションのにぎわいに一役買っている。若手育成に向けて学校設立も計画し、次世代へ種をまき続ける。国民文化祭(いしかわ百石文化祭2023)期間中の今年10月にも、赤羽ホールで公演を開催する。集大成というより、これからの未来に向けた作品を引っ提げて帰って来ます」と力を込める藤高社長。節目を迎えたDRUM TAOと赤羽ホール。ともに地方を拠点に文化発信に取り組む立場として、これからも歩み続ける。

森山開次さん

12日、県立音楽堂で

藤舎昌近さんが安珍役、音楽では洋楽器と和楽器のふれあいが楽しかった。森山さんは「子どもたちを育てたい」と話した。第1部は道成寺の小唄、絵とき説法を行う。午後のチケットは全席指定で円、高校生以下1500円、小学生以下1000円、小学生以下500円。チケットは音楽堂チケットショップ(011-863376)で販売中。

悲恋伝説の舞

石川県音楽文化振興の鼓動(北國新聞社、人具芸術文化協会共催)の鼓動。世界的ダンスカンパニー「安珍・清姫伝説」が上演された。伝説は思いを寄せる大蛇と追いつ追われつを繰り返す。清姫役を森山さんが演じた。



心揺さぶる室内楽

5月3~5日の「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭2023」(北國新聞社特別協力)の本公演では、オーケストラ・アンサンブル金沢(OEK)の名手がスマタナとドルザーク

5月3~5日
金沢で4公演

の室内楽で、心揺さぶる音色を届ける。金沢市アートホールで開く4公演を紹介する。3日の第一コンサートミストレスのアビゲイル・ヤングさん率いるチームはドルザークのボヘミア民族色が感じられるピアノ五重奏曲第2番を奏でる。ピアノには竹田理琴乃さんが加わる。ヤングさんは「国際色豊かなメンバーそれぞれが思いを込めて演奏します」、竹田さん

OEKの名手が演奏



アビゲイル・ヤングさん



松井直さん



トロイ・ゲーギンズさん



坂本久仁雄

は「各楽器が主役となる曲。独特の響きを楽しんで」と話す。コンサートマスターの松井直さんら4人は4日、スマタナの弦楽四重奏曲第1番「わが生涯より」とドルザークの弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」を演奏する。松井さんは「2人の名曲をぜひ聞いて」と語る。同じ4日にはOEKレジエン・ゲーギンズさん、チェロの大澤明さん、OEK永久名音楽監督岩城宏之氏の夫人でピアノの木村かをりさんがドルザークのピアノ三重奏曲第4番

「ドゥムキー」で円熟の音色を紡ぐ。ゲーギンズさんは「東欧の魂が感じられるように演奏したい」と意気込んだ。ドルザークのピアノ三重奏曲第3番とスークのエレジーは最終日5日に披露される。バイオリンの坂本久仁雄さん、チェ

ロの早川寛さんが中心。田島睦子さんが中心。本さんは「力強く明るいロマンを表現したい」。チケットは各2500円。チケットは音楽堂内のチケットカウンター(011-863376)で販売中。

